

20世紀初頭の日本で辿る外国人建築家の足跡

ヘレナ チャプコヴァー

Čapková, Helena | グローバル教養学部 准教授

研究テーマ：20世紀初頭の日本で辿る外国人芸術家の研究 専門分野：美術史と日本学

まず研究テーマを教えてください。

チャプコヴァー：美術史と日本学を専門に研究しています。特に興味を持っているのが、1920年代、30年代の日本と中央ヨーロッパにおいて国境を越えて繰り広げられたヴィジュアル・カルチャーです。日本と中欧でさまざまなネットワークを築いたアーティストや建築家たちが、協働や交流を通じて互いにどのような影響を与え合ったのかを研究しています。これまで20世紀前半の日本・ヨーロッパのビジュアルアーツやジャポニズム、パウハウスなどに焦点を当てた研究を行ってきました。

現在はどのような研究・プロジェクトに取り組んでいますか。

チャプコヴァー：1920年代の日本で活躍したチェコ兼アメリカ人建築家アントニン・レーモンド (Antonin Raymond) とチェコの建築家で舞台デザイナーでもあったベドジフ・フォイエルシュタイン (Bedřich Feuerstein) の仕事や作品に着目した著作の執筆を進めています。レーモンドとフォイエルシュタインが協働で設計した建物として最もよく知られているのが、聖路加国際病院 (旧棟) です。日本とヨーロッパのエッセンスが融合した彼らの作品やその設計プロセスを解き明かしています。

とりわけレーモンドは1919年に帝国ホテル建設のために来日した後、日本に留まり、レーモンド建築事務所を開設。日本に滞在中に何百建築の設計を手がけました。グローバル化が進んだ現代においても、日本でこれほど多くの実績を持つ外国人建築家は登場していません。なぜ戦前の日本でレーモンドがこれほどエネルギーに活動し、多くの作品を生み出すことができたのかについても考察しました。

さらにレーモンドは、インドでも興味深い建物を残しています。1930年代、当時のフランス領ボンディシェリという町に建設された僧院宿舎で、



インドにおける最高のモダニズム建築として高く評価されています。建設プロジェクトには、レーモンドの事務所のメンバーだった、建築家で家具デザイナーのジョージ・ナカシマやチェコ人建築家フランティシェク・サマー (František Sammer) などが参画し、インドと日本、ヨーロッパの国際色豊かなコラボレーションが実現しました。それに加えてレーモンドの公私にわたるパートナーであった妻ノエミの果たした役割も小さくありません。こうした多彩のコラボレーションがどのような結果を生んだのかについても探究しました。

研究活動とともにアート・キュレーターとしても活躍されています。

チャプコヴァー：主にコンテンポラリーアートのキュレーションを行っています。展覧会のテーマや企画に合わせて作品の選定やアーティストとの交渉、展示スペースや展示方法を考えることも重要な仕事です。アートやアーティストについて深い知識が必要なのはもちろん、マネジメント力やさまざまな国の関係者と折衝するコミュニケーション力も問われます。一方で研究の一環としてキュレーションを手がけることもあります。研究者の視点で意義ある展覧会のテーマや企画を練ったり、アーティストを探すのも刺激的な仕事です。

2019年7月から4ヶ月間、立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催された「シグネ・ハーマン作品展」のキュレーションも手がけられました。

チャプコヴァー：2019年4月に開設されたグローバル教養学部 (GLA) のフロアにあるオープンスペース・グローバルラウンジで、「GLArt」と題した展示会を企画しました。キーワードは「出会い」。新学部の開設にあたり世界中から集まった学生・教員の出会いを象徴するものとして、その交流の場であるグローバルラウンジ「GLArt Gallery」を舞台にシグネ・ハーマンの作品「At First Sight」を展示しました。作品を通じてさまざまな「出会い」を体験できる作品展になっています。

今後も「GLArt」をシリーズ化し、展示会を催していくとともに、学生がアート・キュレーションを学び、実践する教育機会としても活用していきたいと考えています。

今後の研究計画を聞かせてください。

チャプコヴァー：私の研究アプローチは、多様なアーティストや建築家、デザイナー、コレクターたちのグローバルなネットワークから新たなつながりやユニークなコラボレーションを発見すること。研究テーマや関心が尽きることはありません。

現在は、明治・大正期の収集家・三田平凡寺が主宰した収集家や文化人の集まり「我楽多宗 (がらくたしゅう)」の活動に注目しています。当時の芸術・文化的なクラブや活動のほとんどが男性だけで占められていたのに対し、我楽多宗には女性や外国人も参加し、非常にオープンで自由な雰囲気になっていました。今後は我楽多宗が発行した機関誌『趣味と平凡』を紐解き、彼らの活動を明らかにしたいと考えています。2020年には我楽多宗をテーマにした展覧会の開催も計画。キュレーションを担当する予定です。

立命館大学
グローバル教養学部

www.ritsumei.ac.jp/gla/

2019年4月に開設した「グローバル教養学部」は自ら学び続ける能力をそなえ、他者を尊重し、文化の違いを越えてコミュニケーションする意志をもって、グローバルな舞台で問題を発見し問題解決へと導く人材を育成することを目標としています。

さらに、オーストラリア国立大学 (ANU) と提携し、立命館大学とANUの2つの学位を取得できるデュアル・ディグリー・プログラムを実現しました。これにより国際通用性の高い大学教育を実現し、世界水準の知的修練の場を提供しています。

